

# 特集

## 国立天文台定例観望会における 学生スタッフの活動

神原永昌（国立天文台定例観望会学生スタッフ／総合研究大学院大学）

### 1. 定例観望会とは

国立天文台三鷹キャンパスでは、毎月2回、定例観望会（定員300名・申込制）を開催しています。50センチ望遠鏡での観望の対象は、月、惑星や二重星など比較的観察しやすい天体から選ばれます。実際の観望会の流れを時系列に沿って説明します。

**(1) 受付** その日の解説資料、整理券を受け取ります。この整理券で約25名のグループに分かれます。

**(2) 待機** 解説が始まるまで、ロビーで待機します。ロビーでは、プラネタリウムソフトMitakaを用い、学生スタッフによる星空の解説が行われます。

その他にも学生スタッフが作成したポスターが展示してあり、学生スタッフがポスターの解説をします。このポスターは、最新の天文学の研究から身近な天文の話題までさまざまなテーマを学生の目線で選び、一般の方むけに解説したものです。また、低学年の子供でも楽しめるように子供向けの展示も用意しています。例えば、双眼状の筒をのぞくと筒の先端に貼ってある天体を見られる「どこでも双眼鏡」やクイズなどがあります。

**(3) 解説** 講義室の広さの関係から、一度に解説を聞けるのは、整理券で分けられた50名です。解説の内容はその日の観望天体から最新の天文学の研究内容まで、その日の担当の学生が行います。

**(4) 50センチ公開望遠鏡での観望** 50センチ公開望遠鏡へ移動し、その日の観望天体を観察します。待ち時間を利用して、その日に見えている星座や惑星の解説もしています。

**(5) 小型望遠鏡による天体観望** 50センチ公開望遠鏡での観望終了後、ドーム周辺に設置している小型望遠鏡で観望します。小型望遠鏡の観望天体は特に決まっておらず、その日の雲の状況等によって柔軟に決めています。観望終了後は自由解散です。

### 2. 観望会を開くまでの流れ

観望会を開くために副チーフは各回のリーダー、解説担当者を指名します。また、毎月新しいポスターを加えているので、ポスター作成の担当者も割り当てています。

#### 2.1 リーダー

10日前に当日の役割分担を考え、配置案を作成し、観望会スタッフのメーリングリスト（以下ML）で共有します。観望会がスムーズに行われるようにこの段階で問題がないかを確認しておきます。

観望会当日は集合時のミーティングや反省会など、全体の取りまとめをします。

観望会終了後、反省会で上がったことをMLに報告し、次回の観望会までに問題点の解決策を実行に移せるように調整します。

#### 2.2 解説・ポスター担当

解説担当は一週間前までに配布資料およびスライドを、ポスター担当は定められた日までにポスターを、ML上で回覧します。他のスタッフは配布資料やスライド、ポスターに目を通し、記述に間違いがないか、わかりやすいか、読みやすい資料になっているかなどを確認して、コメントをします。そのコメントを元に担当者は修正を加え、これができる限り繰り返し、レベルの高い資料の完成を目指します。

### 3. 観望会の組織運営

観望会内の組織は班、チーム、プロジェクトがあり、それらをチーフ・副チーフがまとめる形で運営されています（図1）。

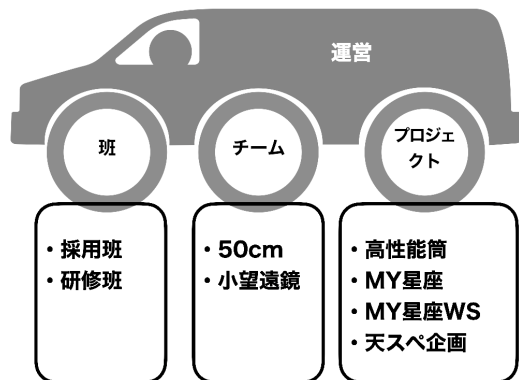


図1 観望会内の組織図

#### 3.1 班

班には採用班と研修班があります。これらは観望会の組織を永続的に支えるのに必要な仕事をこなすグループなので、この中での仕事はできる限り簡略化・効率化をはかり、個々の負担が少なくなるようにつとめています。

##### (1) 採用班

採用班はその年に観望会スタッフが抜ける人数に応じてどのように採用するかを決めて、採用活動が円滑にすすむようにするサポートをしています。

観望会スタッフを目指す人は、観望会見学の申し込みをして、観望会を見学し、応募の案内を受け取り、応募し、面接を受け、結果を待ちます。採用班はこの中の事前見学の受付や応募の案内の送付、応募の受付および面接の案内を担当しています。このように、採用班は人を採用するのではなく、採用活動のマネジメントをしています。

##### (2) 研修班

研修班はその年新しく入ってきた人の研修の仕方を考えます。資料回覧時のコメントは国立天文台の資料として出す上で非常に重要

なので、コメントの活性化をはかったり、発表練習会の開催や、初回研修のマニュアル作り、担当者決めにしたりしています。

#### 3.2 チーム

チームは50センチ公開望遠鏡チームと小望遠鏡チームに分かれて、望遠鏡使用の研修・望遠鏡のライセンス管理・望遠鏡のメンテナンスをしています。

#### 3.3 プロジェクト

期間を区切って新しいプロジェクトを進めています。最近では、どこでも双眼鏡の作成や、可視光以外の画像を使って星を紡いで自分の星座を作る「My星座」というワークシートの開発、天文・科学情報スペースにて観望会で展示されていたポスターの展示、「My星座」を使ったワークショップを星マルシェで実施などのプロジェクトが動いていました。

展示物などはプロジェクトがなくても運用可能なようにするなど、いつまでもプロジェクトが必要な状態ではないようにしています。また、観望会に入って何か新しいことをしたいときなどにさまざまな活動ができる機会を与えています。

### 4. おわりに

このようにさまざまな形で役割分担しながら定例観望会は開催・運営されています。

国立天文台定例観望会は1996年に始まり、間もなく23年を迎えようとしています。今のような効率の良い、また、活気のある運営方法になっているのもこれまで少しずつ改良してくださった先輩方のおかげだと思います。あらためて感謝申し上げます。

神原 永昌